

●2010年9月 総覧 モバイル版 過去記事 検索

- 2010/09/27 第9回首相選挙は9月30日
- 2010/09/26 拳国一致内閣か大統領委任独裁か
- 2010/09/25 ネパール平和構築：HiPeC
- 2010/09/24 Facebookの無限地獄
- 2010/09/22 夫婦別姓パスポートはネパールで
- 2010/09/20 鉄人にも哲人にもなれない軟弱文系人間
- 2010/09/18 視覚障害児クイズ大会
- 2010/09/17 コングレス党大会
- 2010/09/15 威嚇外交：アメリカンクラブの戦略的意義
- 2010/09/14 高所得中間層の成長
- 2010/09/13 田の草取り：農村の厳しさと美しさから学ぶ
- 2010/09/12 UNMINと共に去りぬ？
- 2010/09/11 インスタント・チャッカリへの矮小化
- 2010/09/10 平和産業
- 2010/09/10 利子13%、紙くず同然の紙幣
- 2010/09/08 国歌演奏するも首相選出なし
- 2010/09/07 信号機援助の無残：人治→法治→人治
- 2010/09/06 首相選挙、見学
- 2010/09/05 マオイストの卑俗とプラチャンダの偉大
- 2010/09/04 Ballot & Bullet: あるいは選管とアメリカンクラブ
- 2010/09/03 Sangam Instituteで講演
- 2010/09/03 中国書店

2010/09/27

第9回首相選挙は9月30日

谷川昌幸(C)

26日の第8回首相選挙では、マオイストのプラチャンダ議長が立候補を取りやめ、候補は kongress のラム・チャンドラ・ポウデル氏一人となったが、過半数からはほど遠く、選出されなかった。次の第9回選挙は、9月30日(木)の予定。

■ポウデル：賛成 1 1 6，反対 2，中立 7，棄権 6 1。出席議員総数 1 8 6，立法（制憲）議会定数 6 0 1

国民の代表，国家の最高権力者を選出するというのに，立法議会への出席者はわずか186名。ほとんどニュースにもならなかった。これが国連=先進国ご推薦の包摂民主主義，権力分有，「完全民主主義」なのだ。国連=先進諸国は，つかいものにならない制度を押しつけたのだから，自分の責任を棚上げし，ネパールの政治家や人民を一方向的に非難すべきではない。諸悪の根源は，先進諸国の強欲な経済侵略や無定見な父権的内政干渉にある。



議会通用門前のジャナジャータィ。国連=先進国が解放した実在



「中間搾取者的」存在となった巨大議会，バブル



父権の後見者UN=先進国, これも実在

10:06 | [コメントの投稿](#) | [固定リンク](#) | [この記事引用](#) | [ニュースと政治](#)

2010/09/26

拳国一致内閣か大統領委任独裁か

谷川昌幸(C)

26日(日)は、8回目の首相選挙。帰国したので傍聴はできないが、8回目ともなると、もはやニュースにもならない。民主主義にとって、これ以上の不幸はない。ネパールのおびたしい民主主義者や、その先進国後見役たちはいったい何をしているのか？

今日の首相選挙では、「統一ネパール共産党－毛沢東主義派(マオイスト)」のプラチャダ議長は「ネパール共産党－統一マルクス主義・レーニン主義派(UML)」との合意により立候補を見送るかもしれないが、「ネパール会議派(NC)」のラム・チャダ・ポウデル氏は立候補する予定。しかし、「統一マデシ民主戦線(UDMF)」も棄権するようなので、たとえ立候補がポウデル氏一人になっても過半数にははるかに及ばず、今日も首相は選出されないだろう。

こうなると、一つには、マダブクマール・ネパール首相の政治家としての能力が再評価される。タヌキ親父のようで、つかまえどころがないが、なかなかどうして、暫定首相として立派に役をこなしている。

敬愛する保守主義の始祖バーク先生によると、正統性は時間が創り出す。暫定首相を3ヶ月も継続すれば、もはや単なる暫定とは言い難い。手は縛られているが、その制約の中で、そこそこ統治を継続しているのだから、エライ。しかし、エライことはエライが、せっかく手にしつつある正統性をさらに育成し、自ら正規首相に返り咲く兆しがまったく見えないのが、この人の政治家としての限界であろう。

この状態で、新首相が選出できず、UNMINが2011年1月15日撤退するとすると、やはり暫定政権ではPLA統合や新憲法制定は難しい。状況は、(ネパール側要請を受けた形にせよ)安保理によるUNMIN任期「最後通告」により、いよいよ切迫しており、MKタヌキ親父政権ではごまかしきれない。

安保理は、UNMINがあまりにもバカにされたため、かなり本気で怒っている。安保理決議1939によると、ネパール政府の要請で2011年1月15日まで延長するが、「その後、UNMINはネパールから撤退する」。怒っている。撤退すれば、失敗と非難されるだろうが、それでも撤退する、とケツをまくっている。さて、どうするか？ たった3ヶ月しかない。選択肢は3つ――

- (1)マオイスト・UML・NC が合意し、新首相選出。拳国一致内閣。
- (2)大統領委任独裁

(3)王制復古

(1)は、これまで散々やってきて、この有様。成否は五分五分だろう。(3)は、可能性がないではないが、やはりかなり無理。王制の正統性は継続性。いったん切ってしまうと、英国王制復古など前例があるとはいえ、実際にはかなり難しい。

私のお薦めは、(2)。もっとも現実的であり、先のSangam Institute講演でも、推薦しておいた。ただ、当日も質問があったが、この場合、誰を大統領にするかが問題になる。

極論するなら、誰でもよい。現在のヤダブ大統領でもよいし、他の誰かを選出してもよい。要するに、国家権力の正統性の中心点を創り出す(でっち上げる)ことが大切なのだ。「点」など、もともと実在しない。しかし、その実在しない「点」を想定しないと、たとえば数学も成立しない。

いまのネパールは、MKタヌキ親父統治で何とか持っている。しかし、安保理にケツをまくられ、自ら決めざるをえなくなった。(またまたUNMIN再延長となれば、今度こそネパール政治家の有能性を世界に知らしめることになるろう。)

要するに、右側通行であれ左側通行であれ、どちらでもよい。危険なのは、決定者不在で、どちらとも決められないこと。こうした場合、委任独裁で絶対に決めなければならない最低限のことだけ、とにかく決定してしまうこと。民主主義なんかそのあとでよい。

Resolution 1939 (2010)

Adopted by the Security Council at its 6385th meeting, on 15 September 2010

The Security Council,.....

1. Decides in line with the request from the Government of Nepal to renew the mandate of UNMIN as established under resolution 1740 (2007) until 15 January 2011, taking into account the completion of some elements of the mandate and the ongoing work on the monitoring of the management of arms and S/RES/1939 (2010) 10-53525 3 armed personnel in line with the 25 June 2008 Agreement among the political parties, which will support the completion of the peace process;

2. Decides further, in line with the request from the Government of Nepal that UNMIN's mandate will terminate on 15 January 2011 **after which date UNMIN will leave Nepal**;

12:00 | [コメントの投稿](#) | [固定リンク](#) | [この記事引用](#) | [ニュースと政治](#)

2010/09/25

[ネパール平和構築：HiPeC](#)

谷川昌幸(C)

「広島大学平和構築連携融合事業(Hiroshima University Partnership Project for Peacebuilding and Capacity Development [HiPeC])という長〜くてinclusiveな名称の組織が、トリバン大学ネパールアジア研究セン

ター（CNAS）内にネパール事務所を開設し、そのお披露目セミナーがCNASで開催される。

これは、日本国策に沿った事業であり、日本大使も出席されるようだ（Ambassadorの表記だけなのではっきりしないが）。ネパール側からもMJF（マデシ）のウペンドラ・ヤダブ氏ら各党代表が招かれ、スピーチする予定。

こうした平和構築支援は、いうまでもなく日本の重要な平和貢献であり、HiPeCネパール事務所の今後の成果が期待される。しかし、その一方、紛争後の平和構築支援は、法・制度支援が中心となり、そこへの関与を始めると、ドロドロ、ベトベト、たいへんなことになりかねない。UNMINのように、懇願されて介入しても、しばらくすると悪口のいわれ放題。もういらん、出ていってくれ、どうしても居残りたいのならグダグダ言わずに、もっとカネを出せ、と、もうメチャクチャ、踏んだり蹴つたりの散々な目にあうこともある。

私は、単なる外部の傍観者にすぎず、ヘーゲル先生の遺訓に従い、事象の発生後、その解釈(講釈)をしているにすぎない。世界の変革や未来の予言は、私には到底及ばないこと。無責任な「評論」が私には向いており、それを趣味とし遊んでいるにすぎない。

しかし、世界は誰かによって創られなければならない。平和は誰かが「創造」し、あるいは「構築」しなければならない。日本政府は、十数年前、この「平和構築」を外交の基本方針の一つと定め、以後、防衛省(自衛隊)、外務省などを中心に、それにかかわる多くの事業を立ち上げ、それらに多額の予算をつけ始めた。そこに、遅ればせながら、文科省も参入、平和構築の「研究」や「教育」に取り組み始めたわけだ。

広島大学のHiPeCも、おそらくその流れにさおさすものであり、その意義はいうまでもなく極めて大きい。ただ、これは平和「構築」への参与であり、それなりのリスクも伴う。「民軍協力(軍民協力)」を名とする軍隊(自衛隊)への異常接近や、先述のUNMINのような事態に陥るおそれもある。HiPeCが今後どう展開するか、注目していきたい。

結集者、
 ヒロシマとネパールの共同研究
 『ネパールにむける平和構築』

Launching
 a joint Peacebuilding project in Nepal
 Hiroshima-Nepal

लक्ष्मिक नेपाल कञ्चलिय उद्घाटन सेमिनार
 HiPeC Nepal Office
 Opening Seminar

CNAS-HiPeC Seminar **हिरोशिम-लक्ष्मिक सेमिनार**

"Peace Building Process in Nepal"

10月5-10日、ネパール、ネパールにむける平和構築プロジェクト、

■ Date 開催日: September 27, 2010
2010年9月27日

■ Venue 場所: CNAS, Tribhuvan University,
Kathmandu, Nepal

■ Language 使用言語: English 英語

■ Jointly organized by
 CNAS, Tribhuvan University, Kirtipur, Kathmandu, Nepal
 and HiPeC, Hiroshima University, Hiroshima, Japan

広島大学平和構築推進委員会では、ネパール・トリブハン大学ネパール研究センター内に
 HiPeCネパール事務局を設置し、平和構築研究プロジェクトを開始します。




HiPeC Headquarters
 Phone: 082-424-6936
 Email: hipec@hiroshima-u.ac.jp
 http://home.hiroshima-u.ac.jp/hipec
 Hiroshima, JAPAN

program
 08:00 - 08:30 Registration and Tea
 08:30 - 09:15-Registration
 09:15 - 09:45-Opening address by Prof. Tetsuo F. Adhikari,
 Executive Director CNAS
 & Dr. Y. Yamano, Vice President of Hiroshima University
 09:45 - 10:15- About the programme (Introduction of the project)
 by Prof. Osamu Yoshida
 10:15 - 10:45- Introduction jointly by Ambassador
 of Foreign Minister
 10:45 - 11:15- Inaugural Address by Foreign Minister
 11:15 - 11:45- Inaugural Address by Ambassador
 11:45 - 12:15- Speech by Prof. Dr. Ray P. Shrestha, V.C., TU
 12:15 - 12:45- Chairman's Remarks
 12:45 - 1:15- Thanks by Prof. R. Bardi, Dean of the HiPeC,
 Hiroshima University
 1:15 - 11:30 - Tea
 11:30 - 11:45- Paper 1 (Ethnic Dimension) Prof. On Ching
 11:45 - 12:00- Paper 2 (Ethnic Dimension)
 Prof. Shanta Kumar Shrestha
 12:00 - 12:15- Paper 3 (Social Factors) Dr. Kishor Mishra Shrestha
 12:15 - 12:30- Discussion
 12:30 - 12:45- Chairman's Remarks
 12:45 - 01:00- Lunch
 Session II
 01:00 - 01:15- Paper 4 (Gender) Prof. Dr. Upendra Yadav
 01:15 - 01:30- Paper 5 (Mission) Mr. Mohit Pradhan
 01:30 - 01:45- Paper 6 (Economic) Mr. Rajan Shrestha
 01:45 - 02:00- Paper 7 (Civil) Prof. Dr. Kishor Mishra
 02:00 - 02:15- Discussion
 02:15 - 02:30- Chairman's Remarks
 02:30 - 02:45- Tea
 Session III
 02:45 - 03:00- Explanation of Aims about the General Executive
 03:00 - 03:15- General Discussion with Facilitator in the Room
 03:15 - 03:30- Chairman's Remarks
 03:30 - 03:45- Thanks by Dr. Prakash N. Mishra,
 Head of the HiPeC Nepal Office, CNAS
 03:45 - 04:00- High Tea & Free Time.

12:01 | コメントの投稿 | 固定リンク | この記事を引用 | 平和

2010/09/24

Facebookの無限地獄

谷川昌幸(C)

ずいぶん前に完全削除したはずなのに、またFacebookからメールが来た。ユーザーがいくら削除しようが、いったん手にした情報はため込み、永久に使い続けるつもりらしい。

配信停止の案内もあるが、これはウソに決まっている。こんなものに返信すれば、アドレスが生きている証拠であり、Facebookの思うつぼだ。

これがアメリカのねらう情報帝国主義だ。世界中の情報をアメリカが一元管理し、関連づけて、どこかに蓄積している。大阪地検

のフロッピー記録日時改竄は幼稚な手口だが、情報帝国主義がその気になれば、世界の記録、つまり歴史ですら書き換えることができる。恐ろしい時代になったものだ。

[Facebookの恐怖](#) [Facebookの恐怖・再説](#)

【Facebookから送りつけられてきたメール】

こんにちは、Tanigawaさん 最近Facebookのプライバシー設定が一新され、情報のシェアをさらにきめ細かく管理できるようになりました。Facebookサイトにログインすると、あなたに合ったプライバシー設定を選択するステップを説明するチュートリアルに移動します。このチュートリアルは一定期間のみ提供されています。今回の変更後、プライバシー設定をカスタマイズされていないユーザーの方は、お早めに設定の確認を行ってください。

プライバシー設定のカスタマイズはこちらから: <http://www.facebook.com/n/?home.php&mid>

Facebookチーム プライバシーガイドで変更の詳細をご覧ください。 <http://www.facebook.com/privacy/explanation.php>

このメッセージは、*****@***.***.jp宛てに送信されました。今後この種類のメールをFacebookから受け取りたくない場合は、下のリンクをクリックして配信を停止してください。 <http://www.facebook.com/o.php?c&k=0ddea7&u>

Facebook所在地: 1601 S. California Ave., Palo Alto, CA 94304

11:13 | [コメントの投稿](#) | [固定リンク](#) | [この記事引用](#) | [コンピューターとインターネット](#)

2010/09/22

夫婦別姓パスポートはネパールで

谷川昌幸(C)

某地獄耳情報によると、夫婦別姓パスポートは、旅行者でも在外大使館(在ネパール日本大使館など)で比較的簡単に取得できるそうだ。

日本国家は、明治以降、家制度を天皇制国家の基礎とし、国民を家単位で管理してきた。家制度、その象徴としての夫婦同一姓強制(夫の家=姓に入る)は、日本古来の伝統ではなく、近代的国民統合を目標とした日本国家が創り出した「新しい」制度にすぎない。

夫婦別姓を目の敵にし、日本古来の家族制度を守れなどと叫んでいる保守反動は、新しいものを古いものと錯覚し、伝統を守れと騒いでいるにすぎない。自覚的に「古い制度」を新たに創出し、学校教育により「新しい制度」を「古来の伝統」と教え込んだ明治政府の呪縛に囚われているのだ。

夫婦別姓は民主党政権の成立で一気に法制化されるかと思われたが、さすが明治の先達はエライ、家制度の呪いは民主党をも捉え、夫婦別姓法制化はたちまち腰砕け、いまやかけ声すら聞こえない。

このような場合、最も有効なのは市民的抵抗(civil disobedience)である。政府が認めないのなら、悪しき法制度を市民

自身が掘り崩し、失効させてしまう。政府がいくら戸籍を強制しようが、「戸」籍は人権侵害であり、「個」籍を用いると宣言し、日常的に別姓を通す。郵便も宅配便も、納税通知も投票入場券も届かなければ、もうしめたもの、同一姓強制は瓦解する。

そうした市民的抵抗の最も有効な手段の一つが、別姓パスポートだ。パスポートは日本政府発行の公文書であり、もっとも強力な身分証明書の一つだ。その別姓パスポートが旅行者でも在外大使館で比較的容易に取得できるなら、ぜひみんなで取得し、日本政府に個籍 = 夫婦別姓を認めさせよう。

残念ながら、私の夫婦別姓パスポートは残存期間が6ヶ月を切り、もはやこのパスポートではネパール入国はできず、自分では在ネパール日本大使館で別姓パスポートを申請してみることができない。そこで――

■日本国籍、日本在住、配偶者も日本国籍で、旅行者として外国へ行き、その地の日本大使館・領事館で夫婦別姓パスポートを取得された方

ぜひ、その実例をお聞かせいただきたい。そうした事例がいくつかあれば、夫婦別姓法制化への有力な突破口となると思う。

(注) 国際結婚夫婦の場合は、これまでも別姓戸籍、別姓パスポートが発行されてきたときいている。日本人は、たとえ外国人と結婚しても家系で国家管理するつもりらしい。

[別姓パスポートを取ろう!](#)

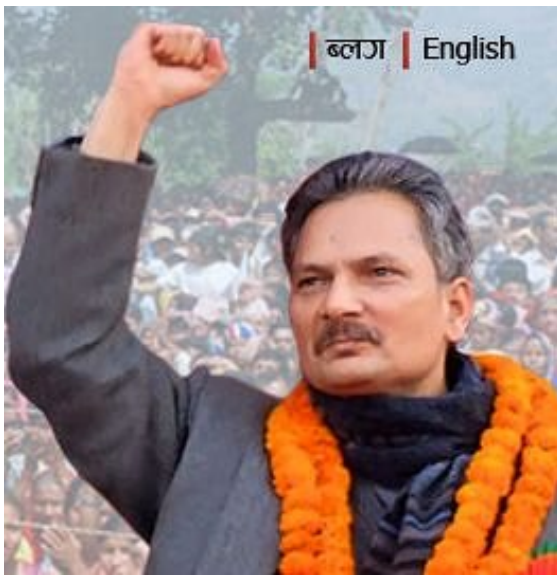
[住基ネットを別姓で笑殺](#)

[夫婦別姓・財界・自民も賛成へ・](#)

[別姓パスポート取得/別姓クレジットカード](#)

[平成14年度 男女共同参画推進事業 男女共同参画セミナー](#)

▼ネパールでは夫婦別姓はごく一般的



夫：バブラム・バッタライ



妻：ヒシラ・ヤミ

10:05 | [コメントの投稿](#) | [固定リンク](#) | [この記事引用](#) | [人権](#)

2010/09/20

鉄人にも哲人にもなれない軟弱文系人間

谷川昌幸(C)

1

ネパールでお目にかかった某氏は、体育会系なのに案外用心深く、狂犬病や腸チフスの予防注射をせっせと受けているらしい。走って筋力強化、予防注射で免疫強化、地獄耳で情報強化——もはや鉄人（鉄の女）といってもよい。

一方、軟弱文系の私は、注射が怖くて「良心的健康診断拒否」を宣言、注射、採血、投薬は極力忌避してきた。職場では哲学教師（哲人）が同志であり、長年共闘をくんできたが、一昨年、退職、いまや孤立無援となってしまった。

2

そもそも健康診断の効果は本当に立証されているのだろうか？ 学校や職場、地域で一斉に健康診断をするといった野蛮な制度は、たしか世界のどの国にもないはずだ。受診集団と非受診集団の間に、平均寿命の差があるのだろうか？ レントゲンやら注射や投薬で、むしろ病気を創り出す方が多いのではないだろうか？

3

「清潔」は近代病である。近代国家は、清潔を要求し、健康＝身体を管理することにより、心を支配する。ネパールに行き、ほっとするのは、この近代的清潔病（潔癖症）から解放され、ありとあらゆる不潔やバイ菌とお友達になれるからだ。人と動物の糞尿

の臭いやしびきを浴び、腐敗ゴミと排ガスにまみれ、人々は生きている。社会も政治も腐敗だらけ。でも、みな平気。

この近代以前（プレモダン）は、近代以後（ポストモダン）でもある。生物多様性が大切なら、バイ菌にも生きる権利がある。人間の都合で殺す（殺菌）などしてはならない。文化多様性が大切なら、汚職腐敗こそ古来のネパール文化であり、キリスト教合理主義（これも文化の一つ）ごときにペコペコする必要はない。腐敗はそれが常態であれば腐敗ではない。

4

これは軟弱文系人間の一種の開き直りかもしれない。そんなに不潔、バイ菌が好きなら、犬か猿にでも噛まれてみよ、と鉄人はお怒りになるだろう。ごもつとも。猿に引っかけたとしても、たとえそれが仏様のお弟子さんであっても、すぐにタイかシンガポールの超一流病院に飛んでいき、近代医学により治療してもらう。理論と実践がかけ離れているのが、軟弱文系人間の特質だ。

でも、軟弱文系人間には、たとえ自分には出来なくても、バイ菌うようよ、ゴミ汚物まみれでも平然たる哲人へのあこがれが、どこかにある。パシュパティナート寺院に行くと、行者がバグマティ川で猿と戯れながら沐浴しているのがよく見られる。バグマティ川は、人と動物の糞尿や死骸、ゴミや他の汚物、そして最近では工場廃液でドロドロ、日本の下水道よりもはるかに汚い。それでも、行者は平然とその「聖なる」川に入り、猿と戯れている。ひっかかれたり、噛まれたりもするだろうが、病気になる気配はない。

5

軟弱文系人間は、悲しいかな鉄人にも哲人にもなれない。鉄人になるほどの強い意志も、哲人になるだけの頑健な体力もないのだ。せいぜい床屋政談で憂さ晴らしするのが関の山である。

(注) 鉄の女 (Iron Lady)

「鉄の女」は尊称、愛称。もっとも有名なのは、マーガレット・サッチャー元英首相。他にも、インデラ・ガンディー元印首相、メルケル独首相などが「鉄の女」と呼ばれた。



最新病院前バス停。バイ菌→病院→バイ菌。

13:42 | [コメントの投稿](#) | [固定リンク](#) | [この記事引用](#) | [文化](#)

2010/09/18

視覚障害児クイズ大会

谷川昌幸(C)

9月14日、NBSA（ネパールの視覚障害者を支える会）主催の「視覚障害児学校対抗クイズ大会」の見学に行った。

会場はラーニポカリ西側のダルバル校。古い宮殿風の格式ある建物で、ラナ時代の校舎かもしれない。近くのTU芸術学部、トリチャンドラ校など、歴史的建造物は修理修復して使い続けてほしい。

クイズ大会は、5校対抗で行われた。自身が視覚障害の司会者が点字書きの問題を読み上げ、各校代表チームがこれに答え、正解数を競う。参加者のレベルは、非常に高い。地理、歴史、政治などの問題に、次々と回答していた。11時頃から始まり、2時間ほどで終了。表彰式後、軽食が出され、散会となった。

この分野の知識はほとんどないが、ざっと見ただけでも、この十数年で都市部の障害者の処遇が急速に改善されたことがわかる。市内では、白杖をもった視覚障害者や車椅子の身体障害者たちが、介護者なしに自由に行動しているのが日常的に見られるようになった。障害を恥じ隠そうとしていた十数年前とは、隔世の感がある。

これは理念・理論と実践活動の成果である。1990年憲法以降の人権保障規定の拡充と、たとえばNBSAのような地道な実践活動の相乗効果といってよい。わずか十数年で、障害者の地位がこれほど改善されたのは、驚異的である。ネパールの人々は、ネパールはダメだと口癖のようにいうが、歴史的に見てネパールの変化は欧米や日本よりもはるかに速い。ネパールは、もっと自信をもってよいのである。



ラーニポカリとダルバル校（グーグル）



校門とクイズ大会横断幕



大会終了後、帰路につく参加者たち

22:07 | [コメントの投稿](#) | [固定リンク](#) | [この記事引用](#) | [社会](#)

2010/09/17

कांग्रेस党大会

谷川昌幸 (C)

कांग्रेसの第12回党大会が今日からカトマンズのラトナ公園野外劇場ほかで開催される。党設立の元勲3人はもはやいない。庶民に人気のあったガネッシュマン・シン氏は、すでに銅像になりラーニ・ポカリ湖畔に立ち、党大会を見守っている。ネパール「人民」がノーベル平和賞に推薦した偉大なギリジャ・コイララ氏は、この4月に死去した。そしてクリシュナ・バタライ氏は、招待を断った。

党首候補は、スシル・コイララ党首代行とデウバ氏。いずれが勝つにせよ、 कांग्रेस党は世代交代、第二世代の時代になる。この点で कांग्रेसは歴史が古いだけに、統一共産党やマオイストに完全に後れをとっていた。世代交代で、新規まき直しとなるかどうか？

しかし、2004年以来の党大会であるにもかかわらず、各界からの来賓も少なく、ショボクした大会になりそうだ。報道によると、大会開催予算は次の通り。

- ・日程：9月17-21日
- ・会場：ラトナ公園野外劇場、ブリクティマングブ、アカデミーホールほか
- ・参加者:約3300人(来賓、オブザーバー含む)
- ・参加費：1000ルピー/1人

- ・宿泊：220 - 250ルピー / 1人(近郊参加者には支給せず)
- ・食費：朝食・昼食・夕食300ルピー / 1人1日
- ・飲料水：7万5千ルピー
- ・大会運営費総額：3千万ルピー（参加費 = 1千万ルピー，寄付 = 2千万ルピー）



ラトナ公園（上）とクーラマンチ（下）（グーグルアース）

【お断り】写真ファイルはネパールで強力ウイルス感染(入管でもチェックされず)。除去後、掲載します。

13:00 | [コメントの投稿](#) | [固定リンク](#) | [この記事引用](#) | [政党](#)

2010/09/15

威嚇外交：アメリカンクラブの戦略的意義

谷川昌幸 (C)

1

アメリカは敬愛すべき民主主義国であると同時に、鼻もちならない自国中心主義大国だ。この二面が併存しているところが、厄介だ。

またかといわれるが、例のアメリカンクラブ。もしこんなものが東京や大阪のど真ん中にあれば、日本人はカンカンに怒り、連日デモを掛け、まちがいなく撤去させてしまう。それほど許しがたい存在なのだ。

2

アメリカンクラブはカトマンズのど真ん中、元王宮の前にある。武装警官十数名がテッポウを構え、24時間厳戒態勢を敷いている。

この施設の特徴は、撮影禁止を塀に仰々しく掲示していること。この施設に向けカメラを構えると、カメラ没収、拘束、最悪の場合は射殺される。そんな恐ろしい外国施設が、東京や大阪のど真ん中、繁華街の中心にある

ことが想像できるだろうか。

3

ネパールは独立国なのか？ この治外法権施設をみると、決してそうではない。こんな屈辱、国辱をどうしてネパール人は甘受しているのか？ なぜマオイストは怒り波状デモをアメリカンクラブにかけないのか？

4

私は、一外国人旅行者にすぎないが、アメリカンクラブの前を通るたびに、腹が立つ。この施設そのものが、人間の尊厳を踏みにじるものだからだ。

撮影禁止の掲示は、撮影禁止それ自体が目的ではない。その気になれば、こんな施設の撮影などいくらでもできる。アメリカは、そんなことは百も承知で、仰々しく「撮影禁止」を塀に貼り、テッポウをもたせた武装警官に厳重警戒させているのだ。

「公然の秘密」は秘密でも何でもない。恐ろしいものがここにあるぞ、という威嚇宣伝こそがこの「撮影禁止」の目的なのだ。そして、その威嚇宣伝の効果をさらに上げるため、無邪気に撮影した外国人、特に無抵抗の日本人をときどきテッポウで脅して連行、拘束し、撮影メモリを没収する。「ならず者国家」とは、アメリカのことなのだ。

5

そのアメリカの厄介なところは、そうやって力で威嚇しつつ、自由・人権・民主主義の旗振りをすること。しかも、自分でも正義を信じ込み、それに酔ってさえいる。

いまアメリカで核廃絶、核何なき世界を叫んでいる政治学者らは、つい先日まで核抑止力論の旗手だった人々だ。彼らは、脅しの効果を熟知しており、その手段の比重を核から通常兵器に移そうとしているにすぎない。アメリカ自身の都合で。

アメリカは偽善を偽善と感じていない。そうでもなければ、テッポウで脅しつつ、自由・人権・民主主義を唱えることなど、恥ずかしくて出来るわけがない。

「カメラ禁止」の啓示の前でテッポウをかまえごく普通の市民や旅行者たちを脅している武装警官たちの写真を撮影し、アメリカ系慈善団体や人権団体の事務所前に貼りだしてやりたいくらいだ。

6

しかし、これが人間社会の現実なのだ。アメリカはお人好しだから、「カメラ禁止」を掲示し、恥部を露出しているが、われわれだってピストルを持った警官に守られ生活している。見せしめ残虐刑の絞首刑さえあるのだ。

そのことを恥じるかどうか、そこが偽善大国アメリカと小心日本国との決定的な違いである。おそらくアメリカ人旅行者は、アメリカンクラブの前を通っても、「恥ずかしい」とも「腹が立つ」とも感じないだろう。い

や、ひょっとして力誇示への「誇り」さえ覚えるのかもしれない。



現在のグーグル地図では「アメリカン・レクリエーションセンター」となっている。CIA保養所？

13:32 | [コメントの投稿](#) | [固定リンク](#) | [この記事引用](#) | [外交](#)

2010/09/14

高所得中間層の成長

1. KFC

王宮前通りにケンタッキーフライドチキン (KFC) ができたので、敬意を表し試食に入った。この通りの両側には、高級店や銀行が次々に開店している。

KFCも大きなきれいな店で、お値段もなかなか立派なもの(2人分)。

- ・チキン2片とカレーご飯少々、イチゴシェイク 309
 - ・ハンバーガー、チキン2片、フライドポテト、ペプシ 379
- 奉仕料10%、消費税13% 計 886ルピー

手のかかる料理ではなく量も少ない。大食のネパール人にはとても足りない。おやつ程度。日本で私はよく牛丼を食べるが、260-280円で昼食としては十分満足できる。それと比べて、ネパールKFCはべらぼうな値段だ。

谷川昌幸 (C)

驚いたことに、そのKFCが地元客で大繁盛している。高収入中間層が拡大しているのだ。



王宮前KFC

2. シティセンター

高所得中間層の拡大は、高級ショッピングセンターが次々建設され、繁盛していることからわかる。カマルポカリ、ロシア文化会館となりのシティセンターもそうだ。

巨大なビルにソニー、東芝や、有名ブランド化粧品、服飾店などが入り、最上階には映画館とおしゃれなレストランがある。日本のショッピングセンターと比べ、見劣りすることはない。

ただ、入口に空港と同様の危険物探知装置が設置されているのは異様だ。ネパールはもともと濃密な地縁・血縁社会で、見ればわかることを前提に社会生活が成り立っていた。危険物探知装置の設置は、そのネパール社会が崩壊し、未知の人々からなる大衆社会となり、しかもテロ防止装置を設置せざるをえないほど格差が大きくなってきたことを意味する。

また、ネパールの巨大高級ビルは、例外なく、迷路のような構造になっている。火災など事故が発生すれば、逃げ出せない。なぜこのような構造にするのか、不思議。利用する前に、まず脱出経路を確認しておこう。



シティセンター。左下が映画入場券販売所、正面が危険物探知装置つき入口

3. 中小零細商店の閉店危機

近代的商業施設の開業ラッシュを見ていると、日本で起こったことが、いずれ近いうちにネパールでも起こることが危惧される。中小零細商店の閉店だ。

カトマンズなどの都市部には、古くからおびたしい数の中小零細商店がある。よくまあこれほどたくさんの店があり、生活できているのだなあ、と感心するほどだ。

いまのところ大型商業施設は金持ち相手だが、いずれ食品・日用品を主とする一般庶民向け大型スーパーが出現することは目に見えている。流通経路が合理化され、ネパール版「価格破壊」が始まると、従来の商店は到底太刀打ちできない。次々と倒産し、大量の失業家族が発生するだろう。

4. 露店

中小零細商店は、下からは露店に脅かされている。露店も激増している。露店は以前からあったが、それほど多くはなく、野菜などが中心で、中小零細商店とは棲み分け分けていた。

ところが、いまや通路、広場、どこにでもおびたしい数の露店が商品を並べて売っている。ラトナ公園周辺など、信じがたい数だ。こうした露天商の収入は、おそらく微々たるものであろう。彼らの生活も思いやられる。

中小零細商店は、いくら小さくても自分の店を構え、地元根付いている。「不動産」とは、「動かないもの」「動かしにくいもの」であり、人の生活はそれと何らかの形で結びつくことにより、地元根付き、安定する。

これは保守主義の基本思想の一つであり、たしかにここには人間社会の真実の一面がある。もしそうなら、ネパールにおける大量の露天商の出現は、都市社会の崩壊が始まる前兆と見てよいであろう。



ラトナ公園露店



遠方に演習場に入る軍用車

5. 物価高

いまネパールは、13%の利子を出しても銀行が儲かるインフレ社会である。バス料金(12ルピー程度)など、政策的に低く抑えているものもあるが、野菜など大抵のものが大きく値上がりしている。

ブリクティマンダプの庶民相手の茶店でコーラを飲んだら、25ルピーだった。チャイ(ネパール茶)にすればよいといわれるかもしれないが、いくら高くても飲ませてしまうのが、コーラ帝国主義の帝国主義たるゆえんだ。貧乏人は高いものを買わされて、ますます貧乏になっていく。

ネパール社会はもうもたないのではないか、と心配になってくる。マオイストは農民運動であり、地に足がつき、統制がとれていた。マオイストが天下を取っても、社会そのものは崩壊しない。

ところが、いまネパールに大量に出現しつつあるのは「群衆」であり、もし彼らが暴動を起こせば、收拾がつかなくなる。そうなれば、結局、軍事独裁となってしまうであろう。

お役所仕事の見本のようなブリクティマンダプの施設にも कांग्रेस党大会の旗やビラがあふれていた。政党、政治家が本気で事態に対処しないと、結局、彼ら自身の居所がなくなってしまうだろう。



ブリクティマンダプ施設の会議派党大会ビラ



会議派党旗、騎馬警官（馬にもマスクを！）



会議派党旗とガネッシュマン像

13:21 | [コメントの投稿](#) | [固定リンク](#) | [この記事引用](#) | [経済](#)

2010/09/13

田の草取り：農村の厳しさと美しさから学ぶ

カトマンズ周辺の水田では、いま最後の「田の草取り」が行われている。女性が4, 5人並んで水田に入り、稲の間の雑草を手で取り除いていく。おしゃべりをしたり歌を歌ったりしながら、楽しそうだ。絵になる。

しかし、実際には、これは大変な重労働だ。日本でも、除草剤(枯葉剤)が使用される以前は、ネパール同様、農民が人力で田の草取りをしていた。ヒルが足に喰いつき血を吸う。稲や雑草の葉で目を傷つける。そして、長時間の腰をかがめた作業のため、腰が曲がってしまう。

以前の日本の農村では、ほぼ例外なく老人の腰は曲がっていた。栄養も悪かったが、最大の理由は長時間の田の

谷川昌幸 (C)

草取りであろう。我が家の隣のおばあさんは、90度どころか、120度以上腰が曲がってしまっていた。機械化・農薬依存以前の農作業の厳しさがしのばれる。

その頃の日本農村は、ネパールの農村と同様、非常に美しかった。どこにいても絵になった。しかし、この美しい農村は、厳しい労働と奉仕作業により維持されていた。人力と牛馬による麦、米、野菜の栽培は重労働だったし、燃料は農閑期に山から切り出す薪だった。田畑も山林も、こうした農民の重労働により、美しく維持されていた。

また絵のように美しい村々は、道路も水路も寺も神社もすべて農民の勤労奉仕と分担金により維持されていた。見方によれば、かつての日本の農村自治は現代の参加民主主義よりもはるかに公平で徹底していたといえる。その反面、農村には個人の自由はなかった。村々の美しさは、個人的自由の犠牲の上に維持されていたのである。

以前の農村のこの重労働、個人的自由の欠如は認めざるをえないが、それでもやはり美しいものは美しい。また農村自治に、現代民主主義以上の公平な参加の一面があったことも、事実だ。

ネパール農村の美しさやブータンの国民総幸福——これらには、懐古趣味だけではなく、時代を超えた普遍的な美しさや幸福の要素が、たしかに在る。

過去に戻ることはできないが、過去から学ぶことはできる。歴史は、過去を否定(克服)しつつ単線的に「発展」するものではない。過去には、現在よりもはるかに優れたものが、たくさんある。それらから学ぶ勇気が、われわれにはますます必要になってきているように感じられる。



キルティプールからパタン方面を望む



キルティプールからビムセン塔方面を望む

12:11 | [コメントの投稿](#) | [固定リンク](#) | [この記事引用](#) | [歴史](#)

2010/09/12

UNMINと共に去りぬ？

谷川昌幸 (C)

UNMIN任期が9月15日に迫り、その去就が注目されている。(日本政府は早々と陸軍派兵6カ月延長を決めてしまい、政治性のなさを世界に披露した。)

国連安保理には、ネパール政府とマオイストから、それぞれ異なった内容の書簡が送られた。独立国としてはみっともない話だが、政治交渉としてはなかなか面白い。

ネパール政府書簡(9月7日付)は、国軍を監視対象から外し、任期を4カ月延長するというもの。インド、NC, UML、国軍がこの考えだ。

一方、マオイスト書簡(9月11日付)は、国軍監視を継続し、任期を6カ月延長するというもの。世間では変に思われるかもしれないが、ネパールではマオイストと国連はお仲間なのだ。

このネパール国論の分裂、とくに政府からのUNMIN批判に対し、国連は、いやなら出ていく、居残るつもりはない、と強がりを行っているが、いま出ていくことはUNMIN失敗を意味し、国連のメンツからして、そんなことはできない。責任問題になる。いや、内戦再発となれば、国連のせいにさえされてしまう。いくら悪口を言われようが、居残らざるをえないのだ。

ネパールでは、懇願されて始めたことでも、ある程度事業が進行し、引くに引けない状態になると、あちこちから悪口を言われ、あげくの果てに、居させてやるからもっと出せと強要される。とんでもない言い分だが、それを通してしまうのがネパール流。身に覚えのある方も少なくなかろう。

かくもさようにネパールは交渉術にたけており、UNMINに対してもその弱味——要請に応じた善意——につけ込み、UNMIN(国連)から最大限搾り取ろうとしている。その意味では、絞られる前に全部出してしまった日本は、賢明といえるかもしれない。

私の帰国は9月15日。かっこよく、UNMINと共に去りぬ、となるかどうか？



空中停止の輸送索道（キルティプール）

12:37 | [コメントの投稿](#) | [固定リンク](#) | [この記事引用](#) | [政党](#)

2010/09/11

インスタント・チャッカリへの矮小化

谷川昌幸 (C)

1. チャッカリ文化

民主化以前のネパールでは、有力者のところに行くと、チャッカリ(ご機嫌伺い)のために多くの人々が並んで待っているのが見られた。なるほど、これが封建政治文化なのだなと感動し、これで何とかやっていけているのなら、それも悪くはないなと感じていた。

1990年民主化で、封建的チャッカリ政治は原理的に否定され、それ以降、チャッカリは徐々に減少し、最近ではそれほど目立たなくなった。さすが、民主化はすごい、社会もこうして合理化されていくのだな、と感心してみていた。

ところが、よく見ると、どうもそうではないらしい。民主化で権力が分散され、それに応じてチャッカリも分散し、矮小化したにすぎないようだ。

2. 本格チャッカリからインスタント・チャッカリへ

民主化以前のチャッカリは、見ていて感心するくらい本格的なもので、封建文化の粹といってよいものだった。ご機嫌伺いのためだけに1日中待ち、1、2分お目通りがかなえば満足して帰っていく。感動的なまでに純であり、粹ではないか。

ところが、民主化による権力分散と情報化(携帯普及)でチャッカリも様変わり、すっかり矮小化した。あちこちの小物有力者に次々と電話を掛けまくり、都合を聞き、チャッカリの約束を取り付ける。もはや待つことはできない。まさしくインスタント・チャッカリである。

3. 本格チャッカリの美学

現代のインスタント・チャッカリは、時間をケチリ、目先の利益のために有力者たちに便宜を図ってもらうという、あさましい動機が見え見えだ。チャッカリの本質はただただ恩寵を待つこと——待つ時間——なのに、携帯という軽薄手段でその時間を惜しみ、チャッカリをしようとする。あさましい限りだ。

これに対し、本格チャッカリは、「無為に待つ」という美しい封建文化をはぐくんだ。いくら待っていても、恩恵が与えられるかどうか、あるいはいつ与えられるかもわからない。生前か死後か、いや何代も後のことか。それすらわからない。ただただ与えられるであろう恩恵を期待し、毎日、チャッカリを続ける。利己の極限としての「無私性」。修行僧のようでもあり、実に美しい。感動的ですからある。

4. 近代精神への転換の可能性

この封建文化の粹としてのチャッカリは、資本主義の元祖アダム・スミスのいう「見えざる神の手」に導かれる近代的「利己心」（啓蒙された私利）と紙一重だ。無私のチャッカリこそが結局は最大の恩恵を与えられることになるからだ。

いや、あのマックス・ウェーバーも、自己の救い（私利）のための神への絶対的奉仕（無私）こそが資本主義の精神を生み、近代化を実現したと言っている。民主主義も、その手段としての合理的官僚制も、すべてこうした絶対的帰依——利己的「無私性」——から生み出されたものなのである。

ネパールの本格的チャッカリ文化は、ウェーバ一流にいうなら、転軸機を切り替えさえすれば、近代化に不可欠の精神的基盤となりうるものであった。

4. 遅すぎた近代化

ところが、残念なことに、ネパール近代化への着手は、あまりにも遅すぎた。先進諸国は、自分たちの近現代文化が神（神的なもの）への絶対的帰依という前近代的精神に、自覚すらないほど依存していることを忘れ、ネパールにはチャッカリ文化の全面的放棄を強制し、目先の利益だけをチマチマ追い求める刹那的市場主義を押しつけた。本格チャッカリがもつ利己的「無私性」、上位者への無限の忠誠は、その積極性をも含め、一切合財捨て去られ、目先の利益だけを追うインスタント・チャッカリに変質させられてしまったのである。（忠誠は反逆を生む。忠誠がなければ、反逆すらない。）

5. 御用聞きインスタント・チャッカリ

現代のインスタント・チャッカリの相手は、国連、援助国、有力NGOなどであり、またそれらと繋がる国内有力者たちである。

人々は、恩恵を与えてくれそうな有力者をウロウロ探し回り、面識ができると、携帯で約束を取り付け、面会し要望を伝え、あまり長居せず引き上げる。要望は、相手の希望を忖度し、それに合わせて作成する。現代版御用聞きである。

本格チャッカリの場合、時間的継続とそれに基づく信頼関係の醸成こそが最重要事であった。人間関係が構築されて初めて、恩寵が与えられるのである。これに対し、インスタント・チャッカリでは、そんな悠長なことはやってはいられない。有力者の希望を出来るだけ早く探り出し、それに合わせた要望（リサーチ案など）を要領よく作成し、提出する。受理されれば利益が得られ、ダメなら次の有力者を探す。チャッカリは、長期的信頼関係の構築ではなく、目先の利益、目先の取引が目的になってしまったのである。

この形骸化されたインスタント・チャッカリは、有力者（ドナー）に依存しつつも、有力者との持続的信頼関係は形成しない。カネの切れ目が縁の切れ目。短期的利害関係だけの殺伐たる人間関係。インスタント・チャッカリはそれしか生み出さない。見方によれば、これは封建社会以上に不幸な非人間的な社会である。

6. 弁証法的展開

いまのネパールには、やはり弁証法的展開がもっと必要なのではないだろうか。過去は単に否定されるのではなく、その中の原理の徹底により内側から弁証法的に止揚され、現在へと展開する。（忠誠は反逆へと展開し、理念を実現していく。）

先進諸国は、多かれ少なかれ、自分たちがそのような弁証法的展開の歴史をもつにもかかわらず、ネパールには過去の単なる放棄を要求する。それはムチャではないか。そんなことをすれば、ネパールは社会関係、人間関係をバラバラに分解され、收拾がつかなくなってしまう。

ネパールには共産主義者がたくさんいる。議員の7, 8割はコミュニストであろう。だったら、もう少し自己のイデオロギーを大切に、弁証法的思考をした方がよいのではないか。現状をみると、インスタント・チャッカリに狂奔しているのは、むしろ共産主義者たちであるように思われてならない。



कांग्रेस党大会横断幕 (サネパ)



कांग्रेस党大会ビラ (同上)

19:36 | [コメントの投稿](#) | [固定リンク](#) | [この記事引用](#) | [文化](#)

2010/09/10

平和産業

ネパールでは、平和産業が繁盛している。人権産業、共和制産業、連邦制産業などもその傘下であり、すそ野は広い。

これらの平和産業は、外国からの投資を受け、その規模、格に応じて超一流ホテル、一流ホテル、二流ホテルでセミナーを開催し、同工異曲のおびただしいレポートを出版している。

谷川昌幸 (C)

その気になれば、ネパールでは一流ホテルでのセミナーをはしごし、365日、食っていくことさえ可能だ。

レポートの執筆料はよくは知らない。しかし、国連関係を中心に、日本でもめったに使用されることのない超高級紙をふんだんに使用していることから見て、執筆料(他の名目かもしれない)はさぞ高いのだろう。適当な内容のレポートをあちこち書けば、そこそこの収入が確保されるはずだ。

平和産業の実態がこのようなものであるにせよ、戦争産業よりはるかによい。戦争産業は人を殺し、財産を破壊する。これは許しがたいことだ。

平和産業は偽善でありケシカランが、少なくとも直接人を殺したり財産を破壊したりはしない。

しかしながら、その平和産業も、特権化していくと、偽善を通り越し、構造的暴力となり、文化大革命のような紛争を引き起こすことになる。ネパールの平和産業が、限度を超えることのないことを祈るのみだ。



十字架やキリスト像が増加。仏像、マニ車、マニ石などの間に置かれている。キリスト教への集団改宗は続いているが、ここでは宗教原理主義は杞憂かもしれない。

16:52 | [コメントの投稿](#) | [固定リンク](#) | [この記事引用](#) | [文化](#)

利子13%、紙くず同然の紙幣

谷川昌幸(C)

ネパールに来て驚くのはインフレ。人も車も百貨店もマンションも生ゴミも、なんでもインフレ。

1. 金利13%

それらのインフレ現象のインフレの中でも、驚かされるのが、銀行の激増と金利13%。日本では0.01%~0.4%くらいだから、もう夢のような金利だ。愛用330万画素カメラの600ピクセル画像で、その迫力

をど〜んとお見せしよう。



どこも銀行だらけ。13%宣伝はラクシミ銀行とは別の銀行。この下にUNDP系機関がある。

制憲議会(国際催事場)向かいの大広告は12.5%だったが、さすが国連、UNDP隣は13%になっている。数百万~千万の金ぴか四駆を大量に持ち込めば、インフレにもなるわけだ。(もちろん他にも13%広告はある。)

2. 物価高騰

13%の利子を払っても銀行がボロ儲け出来るのは、あらゆるもの、特に不動産が高騰しているからだ。カトマंडウの不動産は長崎よりも、いや大阪郊外よりも高い。どんどん値上がりしている。

旅行者としてインフレを最も強く感じるのは、やはりタクシーやリキシャ。タクシーは、もはや100ルピー以下では相手にされない。市内で200ルピー、パタン250~300ルピー、キルティプール350~400ルピーは要求される。多少値切るとしても、日本並みになってきた。リキシャでも100ルピー。

3. 札束でポンと支払い

もっとスゴイ、信じられない、目が点になるような光景を、大サービス600ピクセル画像でお見せしよう。



ホッチキス止めの500ルピー札100枚（5万ルピー）

これはヒマラヤン・バンクで受け取った500ルピー札100枚の束。5万ルピーで約5万7千円。なんとホッチキスで止めてある。しかも、太い針4本で両側から。このホッチキス針をはずし、紙幣をばらすのに四苦八苦、半日かかった。銀行はいったい何を考えているのだ。

が、これは私の考え違いかもしれない。5万ルピー（500ルピー札100枚）や10万ルピー（1000ルピー札100枚）はそれぞれ一つの単位であり、一束単位で使う。つまり、ネパールには高額紙幣がないので、札束単位で交換するわけだ。

私のような貧乏旅行者は、5万ルピーの束をもらっても、それを解体し、1枚1枚チビチビ使う。実にケチくさい。

ところが、金利13%の超高度成長国ネパールには、成金がたくさんいて、5万ルピー、10万ルピーなど、解体する必要はなく、ホッチキス止めのまま札束でポンポン気前よく支払っているにちがいない。ホッチキスで銀行帯封の上から4, 5か所しっかりとじておけば、紙幣の数をいちいち数える必要はない。

たしかに5万ルピー支払うのに、100枚あるかどうか、いちいち数えるのは面倒だ。外せないくらいしっかりとホッチキス止めしておけば、札束のままポンと渡せて便利だ。きっと、これがホッチキス止めの理由であろう。

4. 紙くず同然の紙幣

しかし、銀行と成金は、紙幣を束単位で扱うが、われわれ貧乏人は、それをばらし、1枚1枚ケチケチ使わざるをえない。太いホッチキス針4, 5本で両側からとじられていると、いくら時間をかけ慎重に外しても、紙幣は穴だらけになる。500ルピー、1000ルピーの新札でも、銀行を出たとたん、穴だらけ。日本なら、まちがいないく、紙幣偽造罪で逮捕されてしまう。これも600ピクセルでど〜んとご覧にいれよう。



太いホッチキス針4本で両側からしっかり綴じられている。穴が開いてしまった（通貨偽造罪）

こんな穴あき紙幣は、誰でも嫌がる。少し大きな穴をつくと、店では受け取ってくれない。つまり紙くずだ。銀行は、札束をばらすな、束単位で使え、と暗に要求しているわけだ。

ネパールでは、5～100ルピー札はいうに及ばず、500ルピー札、1000ルピー札ですら、ばらされてしまえば、もはや銀行にとっては紙くず同然だ。

つい2、3年前までは、1000ルピー札は無論のこと、500ルピー札ですら、大きすぎて日常生活では使用しづらかった。どうして100～5ルピー札に替えるか、いつも悩んでいた。しかし、いまではそんな心配は御無用。リキシャですら、500ルピー札を出しても、ちゃんとお釣りをくれる。

円ルピー交換レートには、それほど大きくは反映されていないが、ネパール都市部はいま、とんでもない大インフレ、大バブルである。狂乱物価といってもよい。

これは遠からず破裂する。政治破綻と、どちらが先か。同時発生の可能性が大だが、そうなると目も当てられない。先が思いやられる。

0:27 | [コメントの投稿](#) | [固定リンク](#) | [この記事引用](#) | [経済](#)

2010/09/08

国歌演奏するも首相選出なし

谷川昌幸 (C)

7日、制憲議会に7回目の首相選挙の見学に行った。遅れないように2時半ころ通用門から入場、会議場2階の傍聴席に着く。前回より多く、満席だった。

1. 国歌の権威

ほぼ定刻の3時すぎ開会。全員起立して国歌演奏（CD？）を謹聴。

ネパール新国歌は、国歌だから敬意を表するにやぶさかではないが、純音楽的観点からみてやはり問題がある。以前にも指摘したように、特に終わりの部分が不自然で、なんとも盛り上がらない。

制憲（立法）議会は、共和制では国家の権威と権力の頂点にある最高機関。その厳粛な国政の場で聴けば、この国歌もおごそかに聴こえるかと思っていたが、まったくそのようなことはなかった。最後まで聴かず、盛り下がる部分で早々と着席しようとする人まで出る有様。権威というものは、いったん破壊してしまうと、回復は容易ではない。このことは、国歌についてもいえるようだ。

2. 雑談と携帯

本会議が始まり、議長が発言を始めても、傍聴席の雑談は止まず、あちこちで携帯が鳴る始末。電波遮断はなされていないらしい。

この議場は儀式の場であり、実質的決定は別のところで行われる。ここは儀式のためだけのものだが、その儀式ですら、7回目ともなると、だらけ切り、まるで有難味がない。権威がない。権威のない儀式は、儀式ですらない。雑談と携帯の場である。

3. 首相選出されず

結局、7回目も首相は選出されなかった。2日後の開会だったので、マオイストには勝算があり、そのようなウサが流れたが、最後の20票程度が確保しきれず、期待されたマオイストへの雪崩現象は起きなかった。次の第8回目は、 कांग्रेस党大会後の9月26日の予定。

■第7回首相選挙投票結果

ダハール候補：賛成252、反対110、棄権159、出席総数521

ポウデル候補：賛成119、反対245、棄権151、出席総数515

4. 体制内化チャッカリの場

制憲議会は、討論の場でも民主主義の場でもないが、効果的体制内化の場ではあるようだ。あちこちで有力者を囲んでチャッカリが行われ、600人の大特権集団が形成されつつある。

議場建物横には、軽食堂があり、ここで議員や取り巻きたちがチャイやインスタントラーメンをすすりながら、盛んにチャッカリをやり、人脈づくりをしている。

マオイスト議員もむろんたくさんいる。眼光鋭く、いかにもマオイストという感じの人もいるが、すでにチャッカリ交換やセミナー漬けで多くは कांग्रेसやUML議員と仲良くなり、ずいぶん文明化されている。

著名な人民戦争指揮官A議員を紹介され少し話をしたが、とてもジャングルから出てきた人とは感じられなかった。ずいぶん垢ぬけ、もはやジャングルには戻れないのではないだろうか。

制憲議会は、民主主義とはほど遠いが、少なくともマオイスト議員たちを既存特権階級の人々と交際させ、体制内化する機能は十分に果たしているようだ。

5. 「拍手と喝采」もなし

制憲(立法)議会での首相選挙を見学して、西洋押しつけの包摂民主主義=権力分有民主主義=アイデンティティ政治が、本来の民主主義とはおよそ無縁のものであることが、よくわかった。

特に反民主主義的なのが、比例代表制。これはボス支配、裏取引政治をはびこらせるだけだ。その象徴が、この議場。民主主義の本質は討論にある。その討論がここでは出来ない。委員会でやっているとはいえ、本会議場がこれではそれも帳消しである。

ここは「拍手と喝采」の場にすぎない。いや、6回目、7回目ともなると、その「拍手と喝采」すら、ない。いったいぜんたい、どうなっているのだ。現状では、国王親政以前の1990年憲法体制の方が、はるかに民主的である。

8日付カトマンズポストでの首相選の扱いは、1面中段下の小さな記事。首相選、大統領選をこのように軽〜く報道する国が、民主主義国の中に一つでもあるだろうか？ まったくもって信じられない。これが新国歌をもつ新国家の「完全民主主義」なのか！



CA前ナヤバナスワ交差点。ここでも信号機崩壊



CA正面玄関より。預金金利12.5%。経済崩壊寸前。



本会議場横の軽食堂。



取材陣もほとんど早退(1)



取材陣もほとんど早退(2)



構内(半構内)中国レストラン



中国企業によるTU医学部棟建設(キルティプル)

2010/09/07

信号機援助の無残：人治→法治→人治

谷川昌幸 (C)

タメル入口、文部省前の日本援助信号機の定点観察(ちょっと大げさだが)をしている。派手でよく目立つし、法学・政治学的にも、これは人治から法治への近代化移行支援の一つといってもよく、興味深いからだ。

1. 信号機の機能停止

現状は、無残の一言に尽きる。日本援助の交通信号機は完全に機能停止し、古都景観とはミスマッチの無用の長物と化している。

短期滞在なので、なぜこうなったか、誰がこの決定をしたのか、今後どうなるか、そういったことはよくは分からない。が、とにかく見た限りでは、日本の信号機援助は失敗と言わざるをえない。

2. 信号機：人治から法治へ

信号機が設置される以前は、交差点では、まず相手(車・リキシャ・人・牛など)の様子をみて自分の行動を決めていた。人治である。

車の数が増え、完全な人治つまり交差点完全自治では捌ききれなくなると、警官が出て、手信号で整理し始めた。これも人治。警官は偉そうな人が来ると、当然、優先通行させた。

これはイカンと思ったのが、東洋近代化の模範生日本。人治を法治に替えるのが、しかも内政干渉の非難を受けるリスクなしに派手に目立つ援助として実施できるのが、交通信号機援助だったからだ(たぶん)。

文部省前の信号機設置は、それはそれは華やかだった。短期滞在なので一部始終見学したわけではないが、それでも信号機日本援助の目的と効果を説明する大看板が交差点歩道に設置され、信号(ルール)を守る必要を図解したイラスト入りビラが付近の電柱に貼られ、たしか啓蒙横断幕もあったと記憶している。

設置後しばらく(2, 3年)は、たしかに信号機は機能し始めていた。ネパールの人々も、相手を見て自分の行動を決める(人治)のではなく、信号機(ルール=法)の指示に従い自分の行動を決める(法治)ようになりかけていた。うまくいくな、ネパールの近代化は日本援助で達成できるかな、と愛国心丸出しで期待していた。

3. 警官手信号への置き換え

ところが、やはりダメだった。昨年ころから、信号機があるにもかかわらず交通警察が交差点に出て、歩行者、自転車、バイク、車、牛の整理を始めた。

そして1年後のいま、信号機は消されるか点滅に変えられ、交差点の真ん中には交通整理用のお立ち台が設置され、警官が手信号と笛で交通整理をしている。人治への逆行である。

皮肉なことに、休日、夜間など、車が少なく交通警官がいないときは、交差点中央のお立ち台がロータリーの役割を果たしている。

ネパール人民は、日本援助の信号機を放棄し、国産警官を投入、伝統継承の人治へ戻したのである。

4. 人海戦術

これは、見た限りでは、他の交差点でも同じだ。デリーバザール西側出口交差点、シンハダーバー前交差点など（これらは休日等には信号機に戻されることもある）。環状線(リングロード)の主要交差点はまだ見ていない。

そうした人治(手信号)化交差点の中でも最も惨めなのが、タパタリ交差点。パタン入口、バグマティ川の橋(日本援助)の手前にあるこの交差点は、交通要所であるうえに、ロータリー崩れの複雑な構造になっている。

この複雑なハイテク交通信号機も完全崩壊、見るも無残なガラクタと化している。

タパタリ交差点の中央にはお立ち台が設置され、警官が手信号で交通整理する。さらに進入路の各所に警官が配置され、交通整理している。人海戦術である。

交通警官には、女性が多い。若くビックリするくらい美人だ。イカツイ男の制服姿は威圧的だが、女性の制服姿は美しさを倍増させる。だから、女性交通警官の指示には、皆おとなしく従っている。

手信号に従うのも法治と言えなくもないが、手信号を出すのは人であり、やはり人治に分類すべきだろう。ネパール人民は、近代的法治を伝統的な人治に戻しつつあるのだ。

5. ロータリーの健在

これとは対照的に、英国式ロータリーは健在だ。たとえばマイティガル交差点は、信号機は崩壊しているものの、ロータリーは残されているので、交通はロータリーの論理により自動整理され、かなり能率的に流れている。

ロータリーは、英国民主主義の伝統の具現であり、これが機能する社会は、あえていうならば民主主義成熟社会、より正確にはポストモダン民主主義社会である。

交差点民主主義において、日本は英国に完敗した。短期的には日本型近代合理主義が強いが、長期的には英国型の方が強い。やはり日本はダメだ。英国の古き良き伝統には到底かなわない。

6. 地下鉄とリキシャ

しかし、その英国式ロータリーといえども、このまま車やバイクが増加していけば機能しなくなる。カトマンズやパタンなどが都市再生を図るには、市街地から車やバイクを一掃する以外に方法はない。信号機不要市街に戻

すのだ。地下鉄、路面電車を通し、市街地は原則として徒歩、自転車、リキシャ、牛だけに限定する(指定車を除く)。不便になるが、仕方ない。

一つのモデルは長崎。最近値上げされたが、それでも路面電車はどこまで乗っても120円、回数券なら100円ほどだ。安全快適。

もしネパールがこのまま車増加を放任し、信号機で整理しようとするれば、街を破壊し道路建設する以外に方法はない。しかし、そんな野蛮な文化破壊は選択すべきではない。

日本は、人口密集古都保全型都市交通体系への移行支援に、援助方針を変えていくべきだろう。



文部省前交差点。赤・黄点滅。警官手信号で交通整理。右前方が恐怖のアメリカンクラブ。



文部省前交差点。中央のお立ち台が、警官不在の夜間はロータリーとなる。点滅信号機完全無視。



タパタリ交差点。警官約十名で交通整理。制服姿の女性警官が、メチャかっこよい。



タパタリ交差点。ハイテク信号機消灯。醜いガラクタと化す。反文化的。

12:45 | [コメントの投稿](#) | [固定リンク](#) | [この記事引用](#) | [文化](#)

2010/09/06

首相選挙、見学

谷川昌幸 (C)

5日午後、第6回首相選挙の見学に行った。投票そのものは儀式であり、あまり意味はないが、それでも議場で見学すると臨場感があり、政治の生きた現実を実体験できる。

1. プラチャンダ候補、落選

交通渋滞で制憲議会通用門を入ったのが3時過ぎ、すぐベルが鳴り、あわてて正面玄関に向かって全力で走ったが、1、2分遅れで間に合わず、扉が閉められてしまっていて、プラチャンダ候補(マオイスト)の投票には間に合わなかった。

間に合わなかったのは私だけでない。議員のかなり多くも遅れて締め出され、外にいた。まことにもって締まらない話。

不思議なのは、ヒシラ・ヤミ議員。バイク後部席に乗せてもらってやってきたが、やはり間に合わず、投票できなかった模様。投票拒否のウペンドラ・ヤダブ議員も議場外にいた。

結局、プラチャンダ候補は落選した。

■プラチャンダ：賛成240、反対101、棄権163、出席総数504

2. ポウデル候補、落選

約20分後、ポウデル候補（NC）への投票の始まる前に議場傍聴席に入った。予想通り、もともと催事場なのでバカでかく、なんとも間が抜けている。

傍聴席は2階で、議長席ははるか下前方、まるで緊迫感がない。1階の議員たちも似たようなものであろう。見ている限り、国家の最高権力者を選ぶという緊張感はない。まるで見世物。

以前のシンハダーバーの議場は、なかなか格式があり、大きさもちょうどよく、会議にも緊張感があった。討論や首相選は、こんな催事場でやってはいけない。これは民主主義ではない。政治は大衆向けのショー（見世物）ではないからだ。

投票手続きが始まり、傍聴席でメモを取り始めたら、監視係にメモを取ってはダメと制止されてしまった。こんなところは、やたら厳格だ。

結局、ポウデル候補も落選であった。

■ポウデル：賛成122、反対242、棄権172、出席総数536

3. 有力者の記者会見

投票が終わると、議場＝催事場正面から有力者たちが出てきて、マスコミのインタビューに答えるのを見学した。

マオイストのバブラム・バタライ副議長・ヒシラ・ヤミ夫妻は、早々と出てきて、インタビューもなく立ち去った。あれあれ、孤立していて、影響力を失ってしまっているのかな？

大物たちは、次回首相選の交渉をしているらしく、なかなか出てこない。ウワサでは、やはり次はプラチャンダ議長ということになりそうで、その交渉のようだ。ダメならカナル議長。

1時間ほどして、有力者が次々と出てきて、インタビューに応じては、公用車（パジェロなど大型四駆）に乗り正門から去って行った。

4. 国連と同居

国際催事場には、国連諸機関も同居している。というよりは、国連の方が先に入っていて、そこに制憲議会が転がり込んだという形だ。となると、どちらが偉いのか？

これはなかなか難しいところで、少なくとも使用公用車の点では、国連の方がはるかに上だ。ピカピカの高級車の所有者の方が、そうでない人々よりも偉いにちがいない。

催事場の国連駐車場の公用車とその前に並んだ首相・大臣の公用車とを見比べると、ついそんな余計な妄想に取りつかれてしまう。

5. 首相選とUNMIN

その国連の隣で、UNMINを追い出すことになるかもしれないような首相選が本当にやれるのだろうか？

ネパール政治は、国内の分裂ばかりか、外国介入、国連のメンツなど、さまざまな要因がからんでおり、一筋縄ではいかない。

ネパールの政治家たちは、MK・ネパール首相、プラチャンダ議長、ポウデル議長、カナル議長など、それぞれみな優秀である。その優秀な政治家諸氏をしても、どうにもならないほど、ネパールの政治状況は複雑なのだ。同情を禁じ得ない。

▼追加

5日の投票後、有力者たちが長時間交渉した結果、次回投票は9月7日となった。わずか2日後ということは、交渉ほぼ成立ということであり、おそらくプラチャンダ議長が首相に選出されるだろう。

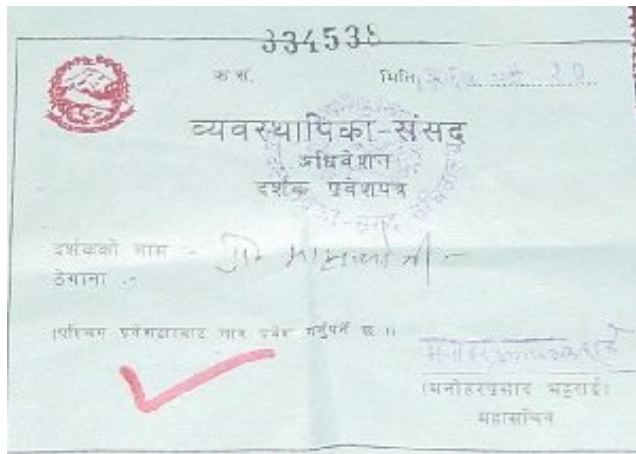
もっとも、そこはネパールのこと、またどんでん返しで振り出しに戻ったり、UMLのカナル議長になったりする可能性がないではない。しかし、国連やPLAの圧力、それにカネの力もあり、プラチャンダ議長が首相に選出される可能性が、5日夜の段階では、一番高いとみてよいであろう。



通用門前でアピールするジャナジャーティ連盟



もちろん中華食堂あり



傍聴入場券



大臣公用車と国連公用車



制憲議会正面。傍聴者は右側扉から2階席へ



早々に退去するバブラム夫妻



ビジュツチェ氏は人気あり



デウバ議員



各局レポーターも大忙し



プラチャンダ議長の四駆。黒フィルムで内部が見えない。

14:45 | [コメントの投稿](#) | [固定リンク](#) | [この記事引用](#) | [ニュースと政治](#)

2010/09/05

[マオイストの卑俗とプラチャンダの偉大](#)

1. マオイストの買収工作

首相選で、マオイストが議員票をカネで買いあさっているといううわさが以前から広がっていたが、どうやら本当らしい。CPN-MLのCP. マイナリ書記長が9月2日公開集会の場で、こんなびっくり発言をした。

「マオイストたちがやってきて、首相選では、5千万ルピーを出すからCPN-MLの9票をUCPN-Mのプシュパ・カマル・ダハール議長に入れてほしい。」(KTP, 3 Sep)

マイナリ発言も、党内闘争がらみなので額面通りには受け取れないが、だからといってこの種の工作がまったくなかったとは思えない。マデシ諸党や他の小政党に対する買収工作は事実とみざるをえない。



政治の貧困が「水商売」を生む

2. 理念政党の卑俗さ

これが権力の恐ろしさだ。制憲議会で第1党となり、首相ポストも一度は手にした。議員はおいしく、首相や大臣はもっとおいしい。カネやポストによる買収への誘惑には、マオイストといえども抗しがたいのだろう。

いや、マオイストだからこそ、というべきかもしれない。理念政党が最もえげつない権力政治、腐敗政治に転落しがちなことは、政治学の常識。現実主義政党、保守政党は、権力の効用と限界を自覚し、その限度内で権力を利用しようとする。これに対し、マオイストなどの理念政党は権力の限界を知らない。

目的(理念)は手段(権力)を正当化する。

人民革命、資本主義打倒を唱えるマオイストが買収などするはずがない、というのは、政治のイロハを知らないからである。理念のためであれば、買収であれ詭計であれ、何でも許される。それが理念政治の恐ろしさである。

買収や詭計はケシカランが、そうした下々の有相無相を止揚して超然と存立するのが英雄である（泥沼の蓮華）。はたしてプラチャンダ議長は英雄たりうるのだろうか？



超俗の英雄たりうるか？

3. 6回目首相選でプラチャンダ首相か？

今日は、6回目首相選が、制憲議会（立法議会）で実施される。ウワサでは、プラチャンダ議長が、一発逆転、首相に選出されるそうだ。国連（つまりアメリカ）が味方なので、ありそうな話だ。

プラチャンダ議長は、偉大な革命リーダーであると同時に人間味あふれる愛すべき人物だ。恐れられると同時に愛される——これはマキャベリの理想の君主像だが、いまそれに一番近いのがプラチャンダ議長だ。プラチャンダ議長にはカリスマ性がある。私は大好きだ。

プラチャンダ議長の不幸は、その愛すべき偉大さを歴史に残す伝記作家を持たないこと。歴史は歴史家が創り、英雄は伝記作家が創る。もし今日、プラチャンダ議長が首相に選出されたら、豪華ベッドではなく、超一流桂冠作家を召抱え、歴史に残るプラチャンダ伝を書かせるべきだ。

人はその像に自らを合わせようとするものなら、プラチャンダ伝がプラチャンダ首相を導き、ネパールに偉大をもたらすだろう。

4. 首相選見学と中国の偉大

というわけで、今日はこれから制憲議会（立法議会）に首相選の見学に行く。中国の建設した巨大催事場の巨大会場で、巨大議会在、その巨大さにふさわしい巨大首相を選出できるかどうか？

それにしても、中国は偉大だ。以前は、こんなこけおどしのバカでかい建物をつくって何になる、中国の国威発揚の場にすぎない、とバカにしていた。ところが、今や、その中国の造った器の中に、議会ばかりか国連諸機関も、すっぽり包み込まれている。

中国の国是によれば、存在が意識を規定する。とすれば、ネパールも国連も中国の掌の上で踊っていることになるわけだ。

中国の偉大には到底かなわない。日本も、中華の辺境で細々と生かしてもらうしか他に方法はあるまい。



国際催事場の威容

14:18 | [コメントの投稿](#) | [固定リンク](#) | [この記事引用](#) | [マオイスト](#)

2010/09/04

Ballot & Bullet: あるいは選管とアメリカンクラブ

谷川昌幸 (C)

毎日シトシト霧雨が降る。昼でも涼しく、夜は寒いくらいだ。日照不足にならないだろうか？ やはり異常気象だろう。

写真は選挙管理委員会。宮殿風の優雅な建物。以前は誰でも自由に入れ、山なす投票用紙を見学したり、事務室でお茶をごちそうになったり出来た。

いまは厳戒体制。入口にテッポウを構えた警官がいて、不用意にカメラでも向けようものなら、即、射殺されかねない。ネパールでは――

[Bullet \(銃弾\) から Ballot \(投票\) へ](#)

ではなく、民主化のおかげで、

Ballot (投票) から Bullet (銃弾) へ、あるいは
Ballot (投票) も Bullet (銃弾) も

に変わったのだ。

カンチパト通りをはさんで選管の向かいにあるのが、例のアメリカンクラブ。つねに十数名のテッポウを構えた警官が警戒しており、カメラを向けたら、まちがいなく撃たれる。ここは、非常時にアメリカ軍を進駐させるための米軍用地にちがいないとにらんでいる。Ballotは、Bulletによって守られているわけだ。

さらに、アメリカンクラブの隣には、銀行もできた。つまり——

Bullet (銃弾) が Ballot (投票) と Bill (紙幣) を守っている。

この付近は、まちがいなくネパールの新名所だ。ネパールにきたら、寺や山ではなく、カンチパトを見学しよう。ただし——

Shot (撮影) すると Shot (銃撃) される

ので、くれぐれもご注意ください。



選管 (西側より)



選管正門



アメリカンクラブ(選管向かい)



メガ銀行(アメリカンクラブ南。アンテナはアメリカンクラブのものと思われる)

2010/09/03

Sangam Instituteで講演

谷川昌幸 (C)

1

9月2日午後、最近売り出し中のサンガム研究所 (Sangam Institute) で講演をした。中心は7月11日の参議院選挙。なぜ民主党は負けたのか、今後の日本政治はどうなるかなど、ネパール政治と比較しつつ、話をした。

出席者は約30人。元駐印大使、王政時代の元大臣、TU教授など、そうそうたるメンバー。彼らを前に、現代日本の社会的不安や経済不況、それを背景とする政治的混乱など、いつもの調子で日本を批判し、多文化社会ネパールの経験のもつ21世紀的意義を大いに評価した。ネパール批判は一切なし。

質問が山ほど出て答えきれなかったが、そこそこ好評だったのではないかな？

2

それにしても、サンガム研究所はリッチだ。ピカピカの豪華な事務室・研究室に最新マックをずらりと揃え、集会室には超大型ディスプレイ。プロジェクターではなく、この最新システムを使用し、講演をした。

ネパールではどのような組織・機関であれ、まちがいなく外国あるいは政党・党派との関係がある。NC系、UML系、マオイスト系、王党派系、インド系、ドイツ系、そしてCIA系、RAW系など。そして、その組織・機関の人と付き合いれば、その系統の人とみなされるようになっていく。

これは日本でも同じで、高い報酬や印税につられ日本の某宗教団体系や隣国の某団体系で講演や執筆をすると、それ系の人間としてさんざん利用される。私のような無名教師にはたいした利用価値はないが、芸能人や著名学者はよく狙われ、アレアレと思わされることがよくある。

3

では、サンガム研究所は、どのような機関なのだろうか？ 昨年、ソルティホテルでカマル・タパ氏を招いてセミナーを開いていたので (私も一般参加)、王党派系かなと思いつつも、それ以上は分からないまま、頼まれ、話をしに行った。

雰囲気ではNC系でもUML系でもなく、もちろんマオイスト系でもない。やはり王党派系なのかな？、という感じだった。

ひょっとすると、CIA系なのかもしれないが、これは分からない。そんな尻尾を出すようでは、秘密機関失格なのだ。(キリスト教系とのウワサもある。)

いずれにせよ、ネパールでは、何系機関かを詮索してはキリがない。こちらのセミナーでは、どの系統の機関の主催であれ、たいがい各党、各派の知識人が入り混じって喧々譁々やっている。身内を集めがちな日本のセ

ミナーや会議よりは、よほど大人だ。

4

私は、もともとUMLの友人が多いので、当初はUML系とみられていた。その後、人民戦争が始まると「マオイストだ」とうわさされ、日本の某秘密機関にマークされていたらしい。そして、今後は、王党派らしい有名機関の本丸で講演をしたので、王党派とみられることになるだろう。

NC天下で「UML系」とみられ、マオイスト＝テロリストの時代に「マオイスト系」とみられ、そして共和制大合唱のいま「王党派系」とみられる。

因果なことだが、裏街道を行くのがわれわれの商売。仕方あるまい。

The screenshot shows the website of Sangam Institute, a policy analysis and strategic studies organization. The main article is titled "Conflict, Peace and Development in Nepal: Reality and Recommendations". It reports on a seminar held on September 2, 2010, at the Nepal Institute. The article discusses the political and social challenges in Nepal, including the impact of the Maoist insurgency and the need for a new political framework. It mentions that the seminar was organized by the Nepal Institute and featured presentations by experts from various fields. The article also includes a photo of a speaker at the seminar.

講演中の私

15:21 | [コメントの投稿](#) | [固定リンク](#) | [この記事引用](#) | [文化](#)

中国書店

谷川昌幸(C)

繁華街タメルを中心に大きな中国書店が開店した(多分昨年)。美しく豪華で他を圧倒している。店名は「中国西蔵書店」。チベット独立派ではなく、中国本家筋。チベット文献以外に、毛沢東、中国革命など中国関係献を展示販売している。

人民帽の店員には商売気がまるでない。中国共産党チベット自治区委員会謹製DVDを買おうとしたら、売値を知らなかった。仕方なく28元と印刷してあった「世界反ファシズム戦争の中の中国」というCD(中華人民共和国國務院新聞公室監制)を336ルピーで買った。いかにも中国的。

この中国書店には、いつみても、ほとんど客はいない。商業ベースなのか、それとも中国の文化政策の一環なのか？ 中国は、タライ（インド国境沿い）に「孔子学院（中国文化センター）」を設置しつつあるという。広い意味で、この中国書店も中国文化進出の一環とみてよいであろう。

中国に限らず、外国進出（あるいは侵出、ときには侵略）を図る場合、もっとも賢明な方法は、文化進出を先行させる方法である。

もっとも巧妙であったのは、英語帝国主義の本家イギリス。片田舎の出来の悪い言語を「世界共通語」にしてしまった。アメリカ文化センター（CIAの出先ともいわれている）、ゲーテ・インスティトゥート、日仏会館など。みな文化進出の先兵である。

だから中国が孔子学院を戦略的に世界展開し文化進出を図るのは当然であり、中国の国力と文化力をもってすれば、将来は中国語が英語に代わり世界共通語になる可能性すらある。

すでに滞在中の日本名のホテルにも、中国人客が増え、中国語が理解できなければ商売に差支えるようになってきた。

中国は大国だから、小国日本の少国民のようにオドオドしていない。今朝もホテル食堂に中国人夫婦が来て、堂々と中国語で注文をしていた。ネパール人給仕が英語で何回も聞きなおすが、中国人夫婦は平気、理解できないのはそちらが悪いといった態度で、中国語で押し通した。

エライ！ さすが、中華の国。小国日本には到底まねのできない大国人民の振る舞いだ。

ネパールにおいて、インドはヒンドゥー教と英語で中国文化に対抗せざるをえないが、ヒンドゥー教はすでに中国渡来の毛沢東思想に敗北し、多くの宗教の一つにされてしまった。英語はインド固有の言語ではなく、屈辱の植民地支配の遺産にすぎない。こんな借り物で他国を文化支配することは無理だ。

客観的に見て、中国が本気になって孔子学院や中国書店をネパール全土に展開したら（これは文化協力・文化支援だからどの国にも反対はできない）、ネパールは中国文化の中に徐々に吸収されていくであろう。中華帝国拡大に銃は不要なのである。



タメルの中国書店



看板屋さん。中国語書換えで多忙

0:01 | [コメントの投稿](#) | [固定リンク](#) | [この記事引用](#) | [文化](#)